

湾岸産油国に対する技術協力の実績及び今後の課題（5）

第5回：ドバイ市郊外修景緑化プロジェクト

アラブ首長国連邦では1970年以降急速な都市化が進められ、70年代の後半にかけては空前の建築ラッシュとなった。80年代になると、道路や都市周辺の樹林造成により飛砂防止や都市内の修景的な緑化をはかるといふ都市生活の環境保全のための緑化に力が注がれるようになってきた。こうした環境緑化活動の一つに、ドバイ市郊外修景緑化プロジェクトがある。この事業は、1985年に開始されたもので、新しいパレスを中心とした計画的な街造りが進められているナディシバ地区における都市計画の一環に組み込まれた緑化事業である。事業内容はパレス周辺を取り囲む防風林とアクセス道路沿いの修景林等の造成およびパレス内の飾花であった。

国際耕種株式会社は当初から本プロジェクトに参加する機会を得た。植林地の造成、灌漑施設の設置、苗木の生産・植栽といった通常業務に加えて、土地条件に応じた樹種の選択、幼苗保護育成のための工夫、要素欠乏やラクダの食害への対策といった技術面での助言を行った。さらに、全体計画の企画・策定、資機材の搬入から人事にいたるまでプロジェクトの運営そのものにも携わった。従来産油国では、最初に大まかな計画を立てるだけで、作業内容は当日になってトップにたつアラビア人のひと声で決められることが多かった。また産油国では、ほとんどの現場作業は外国人労働者によって実施されている。こうした中で我々日本人は、現場労働者の声も聞きつつ、トップのアラビア人に対する助言も出来る位置にいた。従って、技術的な助言に加えて、毎日の現場作業を計画通りに進めることが出来るような調整を行うことも極めて重要な業務であった。このように、トップの要求を的確に理解し、多国籍の労働者集団をうまく組織化し、技術的にも適正な助言を与えることにより、かなり効率的な現場作業を展開することが可能となった。

今後の産油国における技術協力を考えた場合には、本緑化プロジェクトのようにお互いが対等の立場に立ち、技術面だけでなく運営面での助言も与えて行くといったやり方が望ましいように思う。こうすることによって、日本と産油国のどちらにとっても有益で、かつ効率的な協力が継続できるのではなかろうか。

育苗圃場



外国人労働者



85年の植栽状況



91年の生育状況